

Bookstart Newsletter

ブックスタート・ニュースレター



2021
夏
No.73



山梨県北杜市(2019年12月撮影)

特集

コロナ禍に育つ赤ちゃんのためにできること ～「赤ちゃんにとっての最善」をよりどころに～

「例え一千円の予算がかかるブックスタート・パック(※1)を、どのような場でどのように手渡すかによって、その価値は一万円にも百円にも変わるように思う」
ブックスタートに携わる、ある図書館職員の言葉です。絵本などのパックを、ただお土産のように配ること、読みきかせや対話とともに手渡すのとでは、大きな違いがあるのだといいます。赤ちゃんの目の前で絵本をひらき、どんなふうに親子で楽しめるのかをその場で体験してもらうことが、家庭でも絵本のひとときを持つ具体的なきっかけになるからです。

そのため全国の自治体では、「読みきかせの体験」と「絵本」をセットで手渡すという活動の形が大切にされてきました。コロナ禍でそれが難しい状況が続く中、「感染対策」と「読みきかせの体験」をいかに両立させていくかが課題となっています。

そのため全国の自治体では、「読みきかせの体験」と「絵本」をセットで手渡すという活動の形が大切にされてきました。コロナ禍でそれが難しい状況が続く中、「感染対策」と「読みきかせの体験」をいかに両立させていくかが課題となっています。

未知の存在だった新型コロナウィルスも知見・経験が少しずつ得られ、ワクチン接種が進んでいます。こうした社会の変化を見極めながら、現状における「赤ちゃんにとっての最善」に取り組む、2つの事例を紹介します。

今回の特集では、東京都新宿区のブックスタートと、赤ちゃんが日常生活する保育園のコロナ対応を取り上げます。2つの事例（※2）から、コロナ禍におけるブックスタートの実施方法を検討する際に大切にしたい考え方を探ります。

※1 ブックスタートで親子に手渡される絵本やアドバイスブックレット、バッグなど。各自治体が作成した資料も入る。パックの内容は自治体によって異なる。

※2 各事例は取材当時の状況におけるもので、現状とは異なる場合があります。

CASE 01 「すべて」の親子とつながることが第一

東京都新宿区

読みきかせは難しいと判断

すべての親子に出会うため 健診での配付継続を決定

実施方法を検討する中で、読みきかせができるよう、健診ではなく図書館職員とボランティアがブックスタートを実施しています。

活動に長く関わる人も多く、「手前味噌ですが、会場の雰囲気は、すごく良かったです」と担当の大山さんは話します。

しかし、2020年1月には感染防止のため健診での読みきかせを休

止。7月には健診とパックの手渡しを再開したものの、保健師の業務が増大した上、感染予防の観点からスタッフの人数を縮小する必要があつたため、親子への説明や読みきかせは取りやめになりました。

さらに、健診を行う保健センターがワクチンの接種会場としても使用されることになり、読みきかせの再開は目処が立たない状況です。



コロナ禍以前の
新宿区のブックスタートの様子

たら、再びすべての親子に、読みきかせの体験とともに絵本を手渡すやり方に戻せるよう、健診で続けていくことを決めました。

「読みきかせの体験」を補う新講座

同時に、読みきかせの体験を補うため、新たに「妊娠期の保護者を対象とした講座」を企画しました。絵本を通じた赤ちゃんとの関わり方を伝え、子育てに不安を抱く保護者が安心できるような内容にしたいと、今秋の実施に向けて準備を進めていきます。絵本を介して親子が楽しくふれあえるよう支援することで、コロナ

禍でも赤ちゃんが心健やかに育つ環境をつくるねらいです。

* * *

コロナ禍でのブックスタートを考える上で新宿区が大切にしたのは、「すべて」の親子とつながることのできる健診での実施を、長期的な視

点で維持することでした。コロナ以前から大切にされてきた「読みきかせの体験」や「すべての親子に出会える実施機会」を、アフターコロナに向けてどう引き継いでいくかという視点は、現在と未来の「赤ちゃんにとっての最善」を考えることにつながるのではないかと思う。

VOICE



新宿区立こども図書館

大山 優海 さん

新宿区の親子にとって一番のやり方を

全国的に見ても感染状況が深刻な地域ということもあり、これまでのようにボランティアさんと親子が対面してお話をやるリスクが高いと判断せざるを得ませんでした。そうした中でどのように実施していくか、コロナ対応に追われる健康部とどう連携を取っていかなければ良いか、悩みは尽きません。

しかし、厳しい状況に置かれた親子のことを考えると「すべての親子に会える健診で」ということにこだわりたいと思いました。普段図書館に来ないような人の中にこそ、子育ての悩みを抱えている人がいるかもしれません。来館する親子が減った中、借りる本が清潔かどうか気にする姿を見ると、新宿区の保護者の不安はますます大きくなっていると感じます。読みきかせの再開は当面難しいですが、そうした親子とつながるためにも、健診の機会を活かしていきたいというのが図書館の思いです。

CASE 02

保育園

コロナ禍も 子どもの育ちを最優先に

これまで大切にしてきた保育と
感染対策が逆行

子どもが保育者や地域の人とのつながりを感じながら育つ保育を大切に、実践を重ねている東京都武蔵野市の「まちの保育園 吉祥寺」。日々の徹底した感染対策のもと保育を行っています。子どもが日常的に生活し、身体的接触のある遊びを通して社会性や人間関係を育んでいく場である保育園では、保育内容や行事の実施について、都度判断に迫られています。

環境はできるだけ変えない

まちの保育園 吉祥寺がコロナ禍でも特に大切にしているのは、子どもが日々生活する場をできるだけ変えないこと。例えば「明日も遊びの続きをしたい」という子どもの願いを尊重するため、玩具の消毒は一斉に行わず、半分ずつ作業することで遊びの継続をできるだけ保障していく。また、消毒液は二度拭きが必要と言われる次亜塩素酸ではなく、一度拭きですむアルコールを採用。コ

ストはかさみますが、消毒にかかる時間を短縮することで、子どもが道具で遊べる環境を守り、遊びの質を下げないようにしました。

コロナ以前から取り組んでいる家庭への絵本の貸出は一旦は休止したもの、家で過ごす時間を少しでも親子で楽しんでもらいたいという思いから、「どうしたら再開できるか」という方向で検討しました。その結果現在では、貸出の場が密にならないよう短時間で選んでもらうことや、返却する絵本はアルコールで表面を拭くことを保護者にお願いするなど、家庭の協力を得ながら再開しています。

目元だけでも笑顔が伝わるように

子どもの環境ができるだけ変えないという方針の中でどうしても変えざるを得なかつたのが、マスクの着用です。日常的に顔の半分が隠ってしまうため、子どもたちが保育者とのコミュニケーションに困らないよう工夫しています。

例えば絵本の読みきかせでは、笑つたり驚いたりという顔の変化が目元だけで分かるように意識したり、声のトーンをやわらかくするなど、気持ちを伝える工夫をしています。マスクをしていても、表情を意識して読むと、

VOICE



まちの保育園 吉祥寺 園長
庄司 みゆきさん

リスクと価値のバランスを見極めて

子どもにとって、保育園は安心して過ごせる生活の場です。感染症に関する国や自治体の示す基準は守らなければなりませんが、「子どもが何を求めるか」ということを第一に、安心を保障できるよう、職員それぞれの専門性を活かし、話し合いながらラインを見極めてきました。子どもは、家族との関わりの中で安心できる人間関係の土台を築きます。その土台があつてこそ、例えマスクで顔が隠れても私たちを信じて過ごしてくれています。そうした子どもの力を保育者である私たちも信じ、私たちにできることとして、変えなくとも済む環境は維持する努力をしてきました。

コロナ禍でも、子どもはいつも笑顔で、楽しいことは楽しいと体中で表現してくれます。しかし、子どもの成長に適しているとは言い切れない環境であることは事実です。これから先しばらくは「リスク」と「子どもの育ちにとって価値のあるもの」の両方を捉えて判断し続けることが求められます。先が見えにくい状況での選択は難しいですが、みんなで知恵を出し合って、支えあえたらしいなと思います。

まちの保育園 吉祥寺では、子どもが育つ環境を守るために「どのような方法なら可能か」を考えて実行することを大切にしていました。事情元が見えるようにしてはどうかと検討したこともありました。実現はしません



マスク着用でも表情を意識

ましたが、一つひとつ可能性を諦めずに職員間で話し合っています。まちの保育園 吉祥寺では、子どもが育つ環境を守るために「どのような方法なら可能か」を考えて実行することを大切にしていました。事情や状況は異なりますが、「赤ちゃんにとっての最善」をよりどころに対策を考えるという点は、ブックススターのコロナ対応を考えるヒントになりそうです。

専門家から

読みきかせの再開、医学的見地からもぜひ進めてほしい

お茶の水女子大学名誉教授／小児科医 榎原洋一さん



マスクによる発達への影響

0歳の赤ちゃんは、目や口元の動き、そこから聞こえる声などの情報から、相手の関心の行き先に気が付きます。表情を見たり声を聞いたりする経験を通して、他者の意図を理解できるようになっていくのです。

感染が広がり始めてから1年以上、ほとんど的人がマスクを着用しています。そのため、赤ちゃんの発達に影響があるのではないかと心配する声もあります。確かに、表情から得られる情報が減ることは事実ですが、ゼロにはなりません。目元は見えていますし、声も聞こえます。コロナ以前に育った赤ちゃんとは異なる環境ではありますが、その中で使える発達のルートを最大限に駆使して、言葉や社会性を身に着けていくでしょう。

親子の愛着形成や
育児に不安を抱く保護者とつながる機会にも

ブックスタートは親子の愛着形成にもつながっています。今すぐ再開して読みきかせを行わなければ、赤ちゃんの発達に重大な影響を及ぼすということはないですが、コロナ禍により、そうした機会が減ってしまうのは残念なことです。

また、コロナに対する不安から外に出られず、

巣ごもりで育児をする保護者のメンタルヘルスの問題が増えています。ブックスタートは、こうした保護者と地域がつながる数少ない機会でもあるのです。

「安心して出てきてください」と呼びかけて

有効性の高いワクチンの供給が始まり、ウイルスとの闘いもようやく先が見えてきました。子どもの感染率やワクチン接種状況などを総合的に判断すれば、十分な感染対策のもとブックスタートを実施して良いと思います。「安全に実施していますからどうか安心して出てきてください」と、ぜひ呼びかけてください。

アルコール消毒や換気、マスクの着用などに加え、例えば市販で安く手に入る大判の透明ビニールシートを吊り下げて仕切りを作れば、飛沫を防ぎながら赤ちゃんの目の前で絵本を読んでやることができます。

読み手や絵本をじっと見たり、手を伸ばしたりということが実際に目の前で起こるわけですから、保護者には、我が子と絵本をひらく時間の楽しさを知る、これ以上ない体験になります。赤ちゃんにとって何が一番良いかを考え、「読みきかせの体験」を工夫して届けてほしいと思います。

研修会開催のお知らせ

「ブックスタート全国研修会 2021」を
オンラインで開催します

日時：2021年11月25日(木) 14:00～16:00

内容 ①講演／小児科医 三石知左子さん
(東京かつしか赤十字母子医療センター 院長)
②報告・事例紹介／NPO ブックスタート
お申し込み・詳細は当法人ウェブサイトをご覧ください▶



コトコト ことは

かつてのわたしに、今、とっても教えてあげたい。

ふつうのお母さんがほしい、なんて言わないで。ふつうのお母さんなんてつまらない。

今にみんなが、あなたのママを、ママ語を羨ましがるから！

『台湾生まれ 日本語育ち』(温又柔・白水社より)

NPO ブックスタートのスタッフが出した言葉

台湾人の両親とともに3歳で日本に移住した著者には、台湾語と中国語に、ときおり日本語も織り交ぜる母親の言葉を、受け入れられない時期があったといいます。けれど今は、日本語が主軸で台湾語と中国語が少々、という自らの母語を育んでくれた「ママ語」を、心から慈しんでいます。大好きな人の声の記憶をたぐり寄せたときによみがえる、その人のぬくもり。それは何語であっても変わらない、かけがえのない記憶なのだと改めて感じました。